
クリア-スペル（勇者編）

はりがねん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリア・スペル（勇者編）

【Nコード】

N8300X

【作者名】

はりがねん

【あらすじ】

少年は気が付くと、名前以外の全てを忘れていた。そして突然「勇者さま」と呼ばれる。え？ 俺ってば、勇者なの？ なにそれ、カッコいい。ゲームとかでよくあるパターンだな。ゲームってのがなにか分かんないけど、とりあえずカッコいい！

そんな訳で少年、明浩^{あきひろ}は勇者になった。

「魔王倒すぞー！」今日も勇者は空回り気味に張り切っています。

第1話（前書き）

勇者編スタートします。最初から重いです。後半は馬鹿みたいに軽くなる予定です。

第1話

白い鳩が紺色のローブを着た男の腕に留まる。男は鳩の足に巻きつけられていた紙片を取り、それを目で読んでいく。書かれている事を読み取る内、男の腕には自然と力が入っていった。

「……なんだと？」

男は急いで城へと向かう。

この一枚の紙片によって、物語は走り出す。

*

男は即座に王に奏上した。執務室の椅子に腰かけた王は紙片を一読し、呟く。

「ふむ。魔王、とな」

王に紙片を奏上した男の名はラウザ。城の魔術師すべてを束ねる宮廷筆頭魔術師だ。気弱そうな顔、黒い髪に緑の目をしている。この男が筆頭魔術師だと言われても、誰も信じる事が出来ないほど、覇氣がない。

それもそのはず、ラウザは元々研究者として名を馳せている。理論の構築は得意としているが、実践となると途端に動きが鈍くなる。一部の魔術師からは馬鹿にされるが、大多数の魔術師からは尊敬されていた。

「はい。これは独自に集めた情報ですが、おそらく今、この世界にいる人々では誰も魔王に叶わないとのこと。刺激さえしなければ

ば危険はないでしょうが、魔力が巨大過ぎるようです。魔墮ちする民が増えると懸念する声が多数上がっております」

ラウザはある人物と情報を交換しており、その人物から得た情報である。実際にその人物は魔王に会い、その魔力を肌で感じ取ったという。嘘をつくような男ではないので、信頼できる情報だった。

王はラウザの言葉にそうか、と呟く。

「ならば、この世界以外から呼び寄せればよい、という事となるな」

王の言葉にラウザは喜びのあまり、笑みを浮かべそうになった。なぜなら、異世界の物を召喚するのがラウザの目標だったからである。

だが、その魔術は禁止されていた。詳しい事は文献にも残っていないが、召喚者に不具合を起こすらしいというものだ。記述もあいまいで、確証の得られないものだった。だから、ラウザは後に召喚術を成功されるのを厭った術者が、故意に記述したと考えている。

「いかなさいますか」

ラウザは逸る心を抑え、王をうかがう。王は口を開いた。

「異世界から救世主となる者　勇者を召喚しろ」

王の言葉にラウザは一瞬、息を止める。その言葉が浸透すると、ラウザはゆっくりと息を吐き、あえて王に意見した。

「しかし、召喚術は禁術とされています」

「そんなものに構っている場合ではない。やれ。責任は私がとる」

ラウザは内心でほくそ笑んだ。

王へ一礼し、執務室から退出する。歩を進めることに足は速くなり、顔が緩んでいくのを自覚した。

これedyouやく念願が叶う、とラウザは研究室へと進む。

（これで、ようやく異世界人に会える……）

ラウザはそれ以外の事を考える事が出来なかった。

研究室に入ると、ラウザは即座に作業を始める。本来ならば王に確認しなければならぬ事があるのだが、その段階はラウザ自身の独断によって判断した。

（召喚する者の性質は正義。根本は単純。言われる事を従順にこなす程度にしか、頭がない者。そして、その事に決して疑問を覚えず、盲信する者が良い。年齢はそれほど高くない方が都合がいいだろう。そうになると……十二歳前後だろうか。幼すぎても厄介だ。十三ほどにしておこう）

ラウザは魔法陣に召喚する者の情報を入れていく。研究室いつぱいに白い文字で書かれた魔法陣は、次第に完成へと向かっていった。

（後は人数を揃える事、か）

王の許可も貰っているため、禁術であるにも関わらず、ラウザは堂々と人員をそろえる事ができる。実際、禁術に興味を持つ魔術師が何人か集まり、人出には困らなかつた。十人ほど集めた所で部屋が手狭になったため、十人で行う事とする。

「やるぞ」

魔術師たちは魔法陣へと魔力を流し込んだ。

第2話（前書き）

勇者召喚っ！

単純な思考回路をしている勇者を目指しています。むしろ、単純すぎます。

第2話

気が付いたら怪しい人々に囲まれていた。なぜ怪しいかっ
と、その人々は皆一様に暗い色のローブを着ていたためである。フ
ードは被っていないが「どこの宗教団体だ？」と思わず警戒してし
まう。

「な、なんだなんだ、この状況は」

明浩はびっくりして、思わず後ろに下がる。しかし後ろにも人が
いた。彼らは驚いたように目を丸めているが、こちらの方がずっと
驚いている。

「これは……少々失敗してしまったかもしれませんが、まあ、初め
てにしては上出来ですか」

沈黙を破ったのは、どこか気弱な印象を受ける男だった。男とし
ては自分の方が上だと明浩は勝手に判断する。

「はあ？ 何が失敗なんだよ。とりあえず、ここどこ？」
「おや、言葉は通じるのですね」

何言っただ、と思いつながら明浩は男を見た。男はにこにここと微
笑みを浮かべている。

「申し遅れました。僕は宮廷筆頭魔術師のラウザと申します、勇者
さま」

「勇者？」

少しダサイ気もするが、明浩はなんとなくその言葉に惹かれて周囲を見回す。だが、勇者らしき人は見当たらない。というより、みんな同じに見える。

するとラウザと名乗った男は笑みを深くした。

「勇者は、あなたですよ」

「……………」

たつぷり十秒ほど、言葉の意味を考える。言葉を理解すると、明浩は思わず声を上げていた。

「俺が勇者？ マジで？ カッコよすぎるだろ！ さいつこーだよ！ って事は俺、なんかすごい力でも持っていたりするわけ？ すっげーじゃん！」

先程ダサイ、と思った事は棚上げにする。

ラウザは明浩から若干、身を引く。ラウザは興奮する明浩を放置し、ある程度落ち着いた所で声をかける。

「気に入っていただけでしょうか」

「気に入った、気に入った。すっげー気に入ったぜ。 んで、俺はどうすりゃいいわけ？」

ラウザはにつこりと微笑んだ。

「魔王を倒してください」

「魔王？ そんなのもいるの？ すっげー、カッコいい！ まるでゲームみたいじゃないか！」

明浩は不意に動きを止め、不思議そうに首をかしげた。

「……ゲームって、なんだ？」

記憶をいくら辿ろうとしても、白い靄のような物しか見えない。まるで始めから何もなかったかのように、記憶が空っぽだった。

「んー……なんだ、これ？」

「どうかなさいましたか？」

ラウザは不思議そうに明浩に尋ねる。

「なんか、色々と思い出せないんだけど……」

「ああ、それは召喚した際の影響でしょう。きっと記憶が混乱しているですよ」

「ふーん？」

この時、明浩は大して深く考えなかった。実際、考えても仕方ない事である。

「とりあえず、王の所まで一緒に行きましょう」

「王様なんていんのかよ。へえー」

驚きのあまり同じような言葉しか出てこない。まあ、中学生にそれ以上求めるのも酷な所があるだろう、と明浩は一人勝手に頷いていた。

明浩はラウザに導かれるままについて行く。謁見の間とかに通されて伝説の剣とかでも貰えるのかと思いきや、普通に応接室のような所へと通された。

応接室は簡単に表現するなら、ドラマで偉い人が悪たくみを考え

る様な部屋である。もつとも、清潔感はあるし、こちらはドラマよりも遥かに豪華である。

（すっげー）

明浩は物珍しそうに部屋の中を見回す。
うん。まさしく王様の部屋って感じた。

「ラウザよ。それが勇者か？」

部屋に入ると目の前にある立派な机の傍には男が立っていた。派手ではないが、一目見ただけで良い生地だと分かる服で身を包んでいる。そして、男自身も洗礼された雰囲気があった。思わず「ひかえおろーう」と言われそうだ。

「はい。異世界から召喚してきた勇者です。 勇者さま。こちらは我が国の王であらせられる、リーツエ・Q・クリフェルク様です」
「ん？ リーツエさん？ 俺の名前は蒲地^{かまち}明浩。よろしくな」

隣のラウザが何故か固まっていた。明浩は不思議そうにそれを見つめる。王は特に動じた風もなく明浩を見ていた。

「カマチアキヒロか。変わった名前だな」

「そうか？ 別に普通だぞ。ありきたりだと思うけど」

「年はいくつになる」

「十四歳だな」

「職業は何をしていた」

「ん？ 学生」

「そうか。裕福なのだな」

「ぜんっぜん。一応高校までは行かせてもらえるけど、そのまま就

職しろって言われている」

王はそうか、と呟く。

「お前の世界は豊かなのだな」

明浩は首をかしげる。

「俺の世界？　なんだ、それ？」

「お前が元々いた世界の事だ。お前の世界はどんな世界だった」

明浩には王の言葉がさっぱり分からなかった。ラウザは何かを察したらしい。

「おそらく、まだ記憶が混乱しているのでしょう。今日はこのままカマチさまを休ませた方がよろしいかと。いかがでしょうか」

なるほど、と王はラウザの言葉に納得する。

「適当な客室で休ませるがいい。話はまた明日だ。　　　カマチ。お前の世界の話、楽しみにしているぞ」

「おー。でもあんまり期待しないでいいからな」

明浩は友人にするように軽いノリで返す。隣でラウザが内心、冷や冷やしていた事に明浩は気付かない。

こうして明浩は異世界に降り立ったのだった。

第2話（後書き）

すっかりしていると話が重い方向へと行ってしまいます。魔王編はともかく、勇者編は非常に軽いノリにする予定です。

第3話

明浩が案内された部屋は一言で言い表すならば豪勢だった。それ以上の言葉で言い表す事は出来ない。むしろ、中学生にそれ以上の説明を求めないで欲しい。豪勢なベッドを見たら眠くなったため、そのままベッドにダイブして眠った。感想としては、とてもぐっすり眠る事が出来た。

だが

「なんだ、こりゃ」

明浩が目を覚ました時、部屋いっぱいに奇妙な物体が浮いていたのだ。奇妙な物体は淡く輝いており、とても綺麗であった。しかし、いくら綺麗であったとしても不気味である。朝起きて、埃のような奇妙な物体に囲まれているのを想像して欲しい。どう考えても、おかしいだろう。

「お目覚めですか」

扉が開き、ラウザが現れる。明浩は奇妙な物体を指差しながら、ラウザに尋ねた。

「なあ、ラウザ。これってなんだ？ 埃か？」

明浩が指を差す先を見て、ラウザは不思議そうに首をかしげる。

「これ、とは？」

「なんか微妙に光ってる感じの、よくわかんねえ物体の事だよ。部屋いっぱいに浮いてて、正直キショイんだけど」

ラウザは部屋を見回し、納得したように頷いた。

「精霊の事ですね。カマチは魔力が多いのでしょうか。精霊の姿は魔力が多く、かつ純度の高い者にしか見えません」

なんとなくは分かるが、それが一体何なのだろう。

「もっとわかりやすく」

「要は精霊に好かれやすい体質なのです。なので姿が見えるのでしょう。精霊の姿を見る事が出来るのはほんの一部ですので、とても珍しい体質とも言えます。羨ましいですねえ」

明浩は埃　もとい、精霊に手を伸ばす。精霊は明浩の手の周囲を漂うが、近寄ろうとはしない。好かれているはずなのに、放置されているではないか。

「別に寄ってきたりはしないんだけど」

「普通は寄ってきませんよ。空気のような物ですから、意志を持って近付いて来る事はありません」

「ふうん」

明浩は宙を漂う精霊を眺める。

ふと思ひ立ち、精霊を捕まえる。手の中に閉じ込めて、その中を覗き込んだ。

（なんだ、本当に光ってる訳じゃないのか）

精霊は手の中で溶けるように消えていた。つまんねえの。

ラウザは不思議そうに明浩を見ている。

「なんでもない。それで、何の用だったんだ？」

ラウザはどこか釈然としない様子で答えた。

「王様が朝食に誘っておいでです。ご一緒にどうですか？」

「俺、マナーとか出来ねえよ。それでも良いなら良いけど」

「大丈夫ですよ。その事は承知の上ですから。では、ご案内いたします」

なんとなく馬鹿にされたような気がするが、突っかかっても仕方がないので口には出さずについて行く。

案内された場所は、以外にも昨日の執務室だった。てっきり長い机で食べるのかと思っていたので、少し拍子抜けした。

王は接客用のソファから立ち上がる。

「よく来たな、カマチ」

「おう。来てやったぜ」

隣のラウザが硬直した気がした。

「とりあえず、食事にしよう」

王に進められて、明浩はソファに座る。正面の王が座ると、タイミング良く朝食が運ばれてきた。ずっと待っていたのだろうか。ご苦労な事だ。

明浩は運ばれてきた食事をさっさと食べ終える。その速さを見て、王は目を丸めた。

「早いな。お腹がすいていたのか？」

「まあ、成長期だからな」

「そうか。ならもつと食べるとよい」

王が扉の近くに立ってたメイドに目を向けると、メイドは一礼をして去っていく。しばらくして、先程とは別の食べ物が運ばれてきた。

「ありがとう」

メイドに礼を言うと、彼女は驚いたように目を丸める。微笑みを浮かべ、一礼をして扉の傍に控えた。

「よく眠れたか？」

「ぐっすりだったな」

カマチは正直に答える。ベッドの寝心地は最高だった。朝起きたら大量の埃、じゃなくて、精霊に囲まれていたのには驚いたが。そういえばこの部屋にも、ここに来るまでの廊下にも精霊がたくさんいた。本当に空気のように存在しているものらしい。意識しなければ気にならないので、気にしない事にする。

「そうか、それはよかった。カマチの世界はどんな世界なんだ。私たちの世界と、どう違う」

「どうって、具体的にどこら辺が？ まあ、精霊はいなかったと思うけど」

「精霊が、いない……」

王は驚いたように呟く。王の後ろに控えていたラウザも驚いたように息を飲んだ。

「だって俺、こんなの初めて見たもん。埃みたいに、こんなにたくさんいて鬱陶しくないの？」

精霊に意識を向けると、部屋を覆い尽くさんばかりに精霊がいた。明浩は思わず、目の前に浮いている精霊を手で追い払う。

「カマチは精霊が見えるのか」

「見えるっばいね」

「そうか。それも魔術を行使していない状態の精霊を見る事が出来る者など、何百年振りだろうな」

明浩は思わず、王の顔を凝視してしまった。魔術をうんぬんはともかく、何百年という言葉に驚いたのだ。

「そんな珍しいの？」

「漠然と存在を感じたりする者や、魔術を使っている時に見える者は多いです。その代わり、普段の魔力を吸っていない状態の精霊を見る事が出来る者は滅多にいないのですよ」

王の代わりにラウザが答える。しかし、ラウザの説明は分かりにくい。

「もつとかみ砕くと？」

「精霊の存在をなんとなく感じる事が出来る人は大勢いますが、精霊の姿を見る事が出来る者はほとんどいないという事です」

最初からそう言っただけ。専門的な事は分からないのだから、配慮して欲しい物だ。

「では、カマチの世界ではどのように魔術を使っているのだ？」

「魔術って、そもそもなんだ？」

部屋を沈黙が包む。正直、居た堪れなかった。なんだ、この状況は。

「……質問を変えよう。カマチの世界は、どのような物が日常で使われていた」

「ん？ どうだったかな」

明浩は普段、自分がどのように生活していたのかを思い出そうとした。思い出そうとして 出来なかった。

第3話（後書き）

魔王編も見ている人は「あれ？」と思う部分があるかもしれないが、設定です。ですが、ひよつとしたらミスもあるかもしれない。ミスっぱいなと思ったら指摘してください。極力注意していますが、うっかりしている時があるので。

第4話

いくら元の世界の事を思い出そうとしても、全く浮かばない。頭の中が、始めから何もなかったかのように、真っ白だった。

（なんだ、これ）

明浩がいくら思いだそうとしても、記憶の欠片すら思い出せなかった。

固まった明浩を不審に思ってたか、王が不思議そうに尋ねる。

「どうした、カマチ。具合でも悪いのか」

明浩は呆然と王の顔を見て、ラウザを見上げた。

「記憶が……ないんだ……」

「は？」

「……それは、本当なのか？」

口を開いて呆気にとられているラウザに対し、王は怪訝な表情を浮かべている。

「ラウザ、術に何か不備はあったのか」

「不備、と言われましても……禁術でありましたから、術自体の理論に元々不備があったのかもしれない。そうでなくても、異世界の者を無理やりこの世界に召喚したのです。なんらかの異常が出てもおかしくないでしょう。」

もちろん、わたくし自身も不備がないか何度も確認いたしました。当然、術式も何度も練り上げ、その度に確認しました」

「もうよい」

ラウザの言葉を、王は片手を上げて止めた。顔を明浩の方に向けたまま口を開く。

「カマチ、本当ににも思い出せないのか」

明浩は呆然とした様子で頷いた。王はそれを見て神妙で続ける。

「すまない、カマチ。こちらに不備があつたようだ。申し訳ない。いくら謝っても謝り足りないだろう。許してくれとは言わない。こちらにとって、虫の良過ぎる話だと分かっている。

だが、どうか、この世界を魔王の手から守ってほしい。頼む」

明浩は即答する事が出来なかった。しかしすぐに真っ直ぐに王を見据える。

「そう、だよな。そこまでして、この世界を守りたかつたんだろ？
いいぜ、やってやるよ。魔王をぶっ潰して、この世界を救つてやるさ！」

明浩は勢いよく立ち上がり、拳を握った。王は俯いたまま、呟く。

「すまない、カマチ。本当に、すまない」

ラウザは拳を握る明浩を冷ややかに見ている。

（もしかして、成功だったんでしょうか……）

ふと、明浩が思い出したかのように王を見た。

「そういえば、どうやって魔王を倒すんだ？」

「……そうですね。まずはそこからですね」

ラウザは呆れたように呟き、王はラウザに手を振る。

「ラウザ、カマチに魔術を教える事を命じる」

「御意」

「そうになると、魔術を教える者も必要だな。そうになると近衛騎士隊長が良いか……」

王は顔をしかめた。ラウザは王に進言する。

「もし問題がございませんでしたら、推薦したい人物がございます。よろしいですか？」

「許可をする。それは誰だ」

ラウザは微笑みを浮かべた。

「王宮の武術大会で一位に輝きながらも、地方に飛ばされている男ですよ。魔王の事を知らせたのも、その男です」

王は顔を跳ね上げた。

「ルーファスカ！」

「ええ。彼ならば問題はありません。なにより、魔王の姿を間近で見た事のある者です。最終的にカマチの付き人になる事は目に見えています。いかがでしょうか」

王はしばらく考えるように思案する。

「そうだな。ルーファスを呼び寄せよ。後のためにもそれが良いだろう」

「御意。では早速」

ラウザは扉の傍に控えていたメイドに視線を投げた。メイドは頷き、一礼をして去っていく。

「ルーファス？」

明浩はソファに再び身を沈めた。

「ええ。知り合いの男ですよ。彼の实力はこの国でも指折りです。少々雑な所があるのが玉に瑕ですが」

ラウザは苦笑いを浮かべる。明浩はふうん、と相槌を打つ。

「食事が終わったら早速始めるがよい。ラウザ、お前の仕事は当面、免除とする。しっかり勇者に魔術を叩きこめ」

ラウザはにつこりと笑う。王に深く一礼をし、明浩を連れて執務室を出た。

「ん？ もうやるのか」

「聞いていたのですか。食事が終わったらと言っていたでしょう」
「そうだな」

明浩は廊下を歩きながら空を見上げる。特に深く考える事なく、青いな、と思った。

案内された部屋には多くの本棚が所狭しと並んでいた。図書室の

様である。だが、それよりも規模が大きい。とてもではないが、ここに
ある本に手を付けようとは思わなかった。

「魔術、教えてくれるんだろ？　どんな事をやるんだ？」

「まずは座学ですね」

ラウザは本棚から、いくつか本を抜きだす。明浩にその文字を読む事は出来なかった。

「俺、ここの文字は読めねえよ？」

「知っています。言葉だけで精一杯でしたから」

ラウザは日当たりの良い席に明浩を案内する。そこには立派な机が置かれており、正面の壁には黒板が埋め込まれていた。

「さて、どこから始めましょうか」

ラウザは机の上に分厚い本を三冊ほど置く。何往復もして、ラウザがようやく足を止めた時には机の上には十五冊の本が積まれていた。

「……………」

明浩は唾を飲み込んだ。身体が本能的に逃げようとしてるのを感じる。

「……………なあ、ラウザ。まさか、これを全部読めとか言わないよな……………」

「ええ、読んでください」

気が付いた時には、脱兎の如くラウザの前から逃げ出していた。

「ぜ……ぜってー、無理だっ！」

ラウザは明浩の突然の行動に呆氣にとられ、みすみす明浩を逃がしてしまっていた。正氣に戻ったラウザは、急いで明浩の後を追いかけるのだが、根っからの学者であるラウザに敵うはずがない。

そして、この日を境に王城は一氣に騒がしくなる。

二人の熾烈な争いが幕を開けた。

第4話（後書き）

魔王よりも先に別の人と争いを始めてしまいました。

第5話

今日も明浩は朝から城の中を駆け回っていた。王から勉強宣言がなされてから、城内を駆け回るのはほとんど日課になっている。とても健康的な生活であった。

「カマチ！ 今日こそは勉強してください！」

「ヤダね。あんなにたくさん読めるかっての！ そもそも、この国の文字だって読めないし」

「勉強してください！」

「ぜってー、ヤダ！」

ラウザとの追いかけっこは、もはや城の名物と化している。もつとも、この激戦はまだ三日しか経っていない。なのになぜ有名かというと、明浩とラウザはこれを一日中行っているのである。王から叱責はないのかと思いきや、好きにしろ、と完璧にラウザに投げている。

それにも関わらず、ラウザは必死に追いかけてここに参加しているのだ。別に明浩を放置すれば良いものの、彼は必死に魔術を教えようとする。それも途方もない数の本を読ませる事からだ。先程も明浩自身が言っていたように、彼はこの国の文字を読む事が出来ないのである。

（いい加減に諦めてくれよー！）

明浩は正直、勘弁して欲しいと思う。記憶はないが、そういった勉強？などといった類が苦手だった事を身体が覚えているのだ。それはもう、本能的に逃げ出すほどに。

いつものように城の中を駆け回っていると、明浩は曲がり角で鎧に激突した。反動で尻餅をついてしまう。勢いよく激突した額を撫でていると、そこには一人の男がいた。茶色の短髪をした、三十歳ほどの男だ。

「おう？　なんだ、この坊主は」

男は怪訝そうに明浩を見下ろした。明浩は額を擦る手を止め、思わず絶句する。

（で、でっけー……）

男の身長はでかった。おそらく二〇〇センチはあるだろう。明浩はまだ成長途中であるため、まだ一六〇センチもない。ぎりぎり一五〇センチ台である。

「ルーファス、その子どもを捕まえてください！」

ラウザの言葉に、明浩は急いで立ち上がろうとするが、男　ルーファスに首元を掴まれてしまう。明浩は必死に抵抗するが、ルーファスは全く痛くもかゆくもないようだ。

「ラウザー！　ここはいつから託児所になったんだ？」

ようやく追いついたラウザが、息を整えながら答える。

「託児所ではありません。あなたがぶら下げているのが、勇者ですよ」

「は？　勇者？　これが？」

ルーファスは明浩を掴んでいた手を急に放す。明浩はそのまま再び尻餅をついた。

「いってえ。もっと丁重に扱いやがれ！俺は勇者なんだぞ！」

ルーファスは明浩に呆れた様な視線を向ける。

「これが？」

「これが、です。間違いなく。一応、精霊の姿を見る事も出来るほどの術者です。まあ、全く魔術は使えませんが。勉強しようというので！」

一番最後が異様に強調された。事実であるが、大人げない。

「ふうん」

ルーファスは顎に手をあて、明浩を上から下まで観察する。明浩はルーファスを睨みつけた。

「なんだよ。文句あんのか？」

明浩の睨みを特に気にすることなく、ルーファスは答える。

「いや？ちなみに、なんて名前だ？」

「名前を名乗る時は、まず自分から名乗るのが常識だろ」

それもそうだな、とルーファスは笑う。

「ルーファスだ。それで？勇者さまのお名前は？」

「明浩。蒲地明浩だ」

「ふうん。アキヒロね」

ルーファスは何かを考えるように明浩を見る。

「この奴らは蒲地って呼ぶ。どっちでもいい」

「んじゃ、アキヒロ。お前の出身はどこだ」

「は？」

突然の質問に、明浩はルーファスを見上げた。

「お前の出身だよ」

「……知らない」

ルーファスはどういう事だ、という視線はラウザに投げる。怪訝そうにやり取りを見ていたラウザは肩をすくめた。

「どうもこうもありません。召喚する事は成功したのですが、元の世界の記憶が全く思い出せないそうです。元々、召喚術は禁術でしたので、召喚術自体の副作用の可能性もあります」

「へえ。そいつは気の毒なこったな」

どうでも良さそうな言い様に、明浩は眉を顰める。

「お前らが俺を召喚したんだろ」

「そうだな。更に言うなら、俺の所為だな」

「なんでだ？」

「俺が魔王の事を知らせたからだよ」

明浩は目を丸めた。明浩はルーファスに詰め寄る。

「じゃあ、魔王を見たつてのは」

「俺だよ。実際に話もしたし、やり合った事もある」
「！」

明浩は尊敬の眼差しをルーファスに向けた。

「魔王とやり合って無傷だなんて、すげえな。あんた」

明浩の言葉に対し、ルーファスはなぜか苦笑する。

「そりゃあな。手加減バリバリされてたからな」

「手加減？」

「そうじゃなきゃ、今頃ここにいないって」

「そんなに強いのか、魔王は」

明浩の言葉に、ルーファスは頭を掻いた。

「強いつていやあ、強いんだろうな。能力だけで見るなら、この世界で一番強いだろうな」

「そんなの相手に、よく無傷でしたね」

「だから、手加減されてたんだって」

ラウザの言葉にルーファスは呆れたように答える。

「そつえば、属性はなんだったんですか？」

「ああ。属性？ 属性なあ」

ルーファスは何かを考えるように顎に手を当てた。

「分かんね」

一拍ほど、沈黙が流れる。

「あ、あなたはそれでも騎士団長ですか！」

ラウザは怒りのあまりか、顔が赤くなっていた。対するルーファスは全く気にしていない様である。

「しがない街の、一騎士団長だよ。そこら辺の奴等みたいに期待すんじゃないよ、ラウザ。気になるんだったら、弟にでも聞いてみりゃあいい。あいつは実際に魔王を治療してるしな」
「は？」

ラウザは呆気にとられていた。明浩は珍しい事もあるんだな、とラウザを見ている。

「とりあえず、もう今日は休ませてもらっぜ。ここまでぶっ通しで来たんだからな。ちったあ休ませろ」

ラウザはそのままどこかへと消え去っていった。

第5話（後書き）

ようやく団長さんの名前が出てきました。別に考えていなかった訳ではありません……たぶん。

第6話

明浩とラウザはルーファスの背を見送った。ラウザは大きく溜息をつき、そのまま明浩を捕まえる事なくどこかへ向かっていく。明浩としては追いかけられないので得した気分だった。

「授業もないみたいだし、これから何して遊ぼうかな」

授業を受けた事など一度もないのだが、追いかけられずに落ち着いて過ごした事はない。せっかくなので、城の中を探検する事を思い立つ。明浩は城の中を探検する事にした。

城の中には多くの人が勤めている。メイドさんに執事さん、騎士や魔術師などが大勢いた。当然の事ながら、ほとんど面識がない。同じ空間にいるのに名前すら知らない、というのは奇妙な感覚だった。

（でも、こんなに大勢と知り合いになるって方が難しいよな）

なぜその事を奇妙に思うのかが、逆に不思議である。

明浩はその事を頭の隅に追いやり、探検を再開した。これほど広い城なのだ。隠し扉の一つや二つあってもおかしくない。明浩は壁に手を当てたり、天井を見上げたりして城内を歩く。他の人からは不審者のように見られているのだが、本人は気付かない。

「何をしているのですか？」

壁に耳を当てていると、唐突に声をかけられた。明浩は耳を壁に当てたまま答える。

「んー、隠し部屋とかないかと思って」

「見つかりましたか？」

「まだだ」

「わたしも協力しましょうか？」

後ろを振り返ると、そこには小さな女の子がいた。くすんだ金色の髪に、宝石のように澄んだ赤い色の目をしている。華美ではないが、可愛い服で身を包んでいた。はっきりとした顔立ちをしており、十歳程に見える。将来とても美人になるだろう、と疎い明浩でも容易に予想できた。

「……もしかして、迷子？」

大人ばかりの城の中で、少女は非常に浮いて見える。実際、周囲の人から注目を浴びていた。少女は周囲の目を気にした様子もなく、首を振る。

「いいえ、迷子ではありません。それに、城の中はわたしの庭のようなものです。きっと力になれますよ」

十歳とは思えないほど、丁寧な言葉遣いで言葉を紡ぐ。容姿と相^あ俟^{いま}って、少女は人形の様にも見えた。

「そっか。でも、親が心配するんじゃないか？」

「平気です。親も城の中にいる事は知っていますから」

明浩は考え、頷く。もし仮に迷子であつたとしても、王に言えば問題ないだろう。明浩はそう判断した。

「そっか、なら良いぜ。じゃあ、どこから探す？」

「外から探しませんか？」

少女の提案を意外に思い、明浩は思わず凝視してしまう。

「なんで？」

「外の方が目星を付けやすいです。それに、カマチは精霊の姿が見えると聞きました。でしたら、精霊の流れ道を辿れば早いと思います」

明浩は少女の言葉に首をかしげる。

「精霊の流れ道？」

「はい。そういった隠し通路や隠し部屋というのは、魔術で隠される事が多いのです。なので精霊の流れを追えば、自然とそういった物は浮き彫りにされるのです」

「へえ、物知りなんだな」

「ありがとうございます」

口では感謝の言葉を述べているが、表情からはとても喜んでいる様には見えなかった。それどころか、先程から少女の表情は全くと言って良いほど、変わっていない。

もっとも、明浩は他人の顔色を窺うという高等な技を持っていないため、その事には気付かなかった。

「それじゃあ、庭に行こう」

少女は頷き、明浩を庭へと案内する。

城の庭は中央に噴水があり、見栄えを引き立たせる様に植物が植えられていた。明浩には花を愛でる趣味はなかったが、すっげー綺麗だな、と思える程度には綺麗であった。

「精霊の姿、見えますか？」

「ん？ ああ、見えるぜ」

明浩は意識して周囲を見回す。庭に限らず、背後の廊下にも多くの精霊がいるのが見えた。

「でも、こんだけ沢山いたら、正直見つけられないな。どうすんだ？」

何気なく少女の方を見て、明浩は目を丸める。目を擦ってから再び少女を見るが、やはり見えている物は変わらない。

「どうかされましたか？」

少女を凝視していると、視線を感じた少女が明浩を見上げてきた。明浩は少女とその間で視線を行き来し、諦めたように溜息をつく。

「いや、なんでもない」

特に害のある者にも見えなかったので、そのまま放置する事にした。

少女は不思議そうに首をかしげている。しかし目的を思い出したのか、すぐに口を開いた。

「それより、精霊の方はどうですか？ 見えますか？」

「じゃんじゃん見えてんぞ。正直どう流れてんのか、さっぱり分かんらん」

精霊は実体がないのか、ぶつかる事なく精霊同士がすり抜けなが

ら浮遊している。特定の精霊を追うのは難しい様に思えた。少女は予想していたのか、特に驚いた様子もなく頷く。

「でしたら、色の持った精霊を探してください」

「色の持った精霊？」

「ええ。精霊は術で利用される際、色を持ちます。炎であれば赤、風であれば緑、といった具合ですね。なので、術で隠されている場所を探すのであれば、色付きの精霊を探すのが有効です」

なるほど、と納得して明浩は色付きの精霊を探し始める。その頃には、少女の近くにいるその存在を綺麗に忘れていた。

第6話（後書き）

出すつもりのなかったキャラクターが登場しました。彼女の正体は当然、明かされません。

第7話

日が暮れるまで城の庭を歩き回り、明浩はようやく色の持った精霊を見つけた。

「いたぞ。なんか水色っぽいのがいる」

「水の魔術が近くで使われているんですね。そのまま辿っていきましよう」

少女に促され、明浩は奥へと進んでいく。しかし奥に行くにつれ、明かりが届かず暗くなっていった。精霊が淡く光っているため、完全に真っ暗になる事はない。しかし、時間をかけ過ぎたのではないかと明浩は思う。

「今日はもう、ずいぶんと暗いな。親のところに行かなくて大丈夫なのか？」

明浩は後ろからついて来ている少女に振り返る。少女は首を振った。

「大丈夫ですよ。言っただけです。ここは私にとって庭のような物だと。それは比喻でも何でもなく、事実なんです」

ややこしい言い回しに、明浩は混乱する。

「……ごめん、もうちょい分かりやすく」
「ここが私の家です」

明浩はようやく理解した。

「ああ、なるほど。ここが君の家なんだ……って、家!？」

思わず少女を凝視すると、少女は明浩を不思議そうに見返した。

「はい。家です。なので、心配は必要ありません」

「ああ、そっか。うん。じゃあ気にしない」

一瞬、王家の人かと思ったが、そんなはずはないだろうと思い直す。明浩の想像では、王の家族はもつと近寄りがたい雰囲気だと思う。この少女自身も近寄りがたい雰囲気を持っているが、声をかければ普通に受け答える。少し表情に乏しいかもしれないが、いたって普通だ。

「でもさ、さすがに今日は終わりにしない？　こつも暗いと足下とか危ないし」

少女は考える様に首をかしげ、頷く。

「それもそうですね。ではまた今度にしますか？」

「うん。明日……はどうなんだろっ……うーん」

明日からは例の騎士から色々と訓練されるのかも知れない。そうになると、自由な時間があるかは分からなくなる。ラウザの授業は逃げるつもりだが、あのルーファスという男から逃げ切れる自信がなかった。

「それでしたら心配ありません。私も明日から出掛ける予定です。なので当分先の話になると思います」

「あ、そうなの？　じゃあ、帰って来たらまた一緒に探そっか。俺

の名前は蒲地明浩。カマチでもアキヒロでも好きな方で呼んでくれ。君の名前は？」

「えっ……」

少女は不思議そうに明浩を凝視する。なぜ凝視されなければならないのか、明浩には分からなかった。明浩は首をかしげる。

「ん、どうした？ 俺の顔に何か付いてるか？」

少女は首を振った。

「いいえ。何も付いていないです。……私の名前はグラスファイです」
「へえ、グラスファイね。なんかカッコいい名前だな」
「……それは、褒め言葉でしょうか」

少女　グラスファイの言葉に、明浩は屈託のない笑顔を浮かべる。

「うん。すっげえ褒め言葉だよ。だって？ グラスファイ？ って、なんかカッコいいじゃん！」
「……………そうですか」

グラスファイは明浩に背を向けて歩き出す。

「それでは、またいつか会いましょう。アキヒロ」
「おう。途中まで送るか？」

グラスファイは明浩に振り返り、首を振る。

「必要ありません。これで失礼します」
「おう。また今度な」

手を振る明浩にグラスフィは背を向けて歩き出す。明浩はそれを見送り、固まった筋肉を解すように肩を回した。

「さあって、どうしよっかな。とりあえず、腹が減ったからメシか！」

明浩は城の中へと戻っていく。食堂の道を近くの人に聞き、食堂へと向かう。

「……あれ？　そういえばグラスフィって、城に住んでるんじゃないかったのか？」

グラスフィは城から少し離れた方角へと向かっていたように思う。そちらの方に家があるのだろう、と明浩は一人で納得する。

（城自体が家って言われると、なんかすごい驚くよな）

城内に住んでいるから？　家？と表現しているのだろう。城内に家を持っている人は一体どれくらいいるんだろう、と明浩は考えながら歩く。

（ラウザとか、絶対に住んでそうだよな）

学者とか研究職の人はそういう印象だ。そんな事を考えながら歩いていると、美味しそうな匂いを嗅ぎ取った。明浩は匂いのする方へと走る。匂いのする部屋を覗いてみると、そこは厨房だった。広い厨房で、何人もの人が駆け回っている。大変そうだな、と明浩が眺めていると色を持った精霊を発見した。

（おおぅ。赤く光ってる！ そっか、火を使うにも精霊が必要なんだな）

それとも精霊が火に引き寄せられているのか。

明浩にはどちらか分からない。

「おっと、とりあえずメシだな」

調理している様子を見ていても、お腹は膨れない。空腹が増すだけだ。明浩は自らの目的を達成するためにも食堂に向かう事にする。食堂は広い。それこそ王様が食事する時（明浩の勝手な想像のもの）の長いテーブル並みに奥行きがあった。明浩は列の最後尾に並び、今か今かと食事を心待ちにしている。

後もう少して食事を受け取れると思った時だった。

「ようやく、見つけましたよ」

肩を掴まれ、明浩は列から引き抜かれてしまう。

「あ、ちょっ……おい！ 後少して俺の番だったんだぞ！ なんて事をしてくれるんだ！」

明浩が後ろを向くと、そこには変わり果てた姿のラウザがいた。どこにいたのか、服は埃だらけで、頭や袖に葉っぱもくっついていく。

思わず明浩は絶句した。

「どうしたんだ、それ。研究もいいけど、程々にしないと彼女出来ないぞ」

ラウザは思い切り眉を顰め、明浩を食堂から引つ張り出す。食堂から出た所で、ラウザは大きく息を吸った。

「一体、誰の所為だと思っているんですかー！！」

その日、ラウザの悲痛な声が城内に響き渡ったと言う。
ちなみに、叫ばれた当の本人は全く理解していなかったそうだ。

第8話（前書き）

久しぶりの更新です。

第8話

明浩は現在進行形で、ラウザから長い説教を受けていた。ラウザに捕まってから始まった説教は、朝日が顔を出すまで続く。説教が終わる頃に明浩が完全に夢の中へと飛んでいたのは、仕方のない事だろう。

「なんでちゃんと聞いてないんですか！」

「うつせーなあ。細かい事は気にすんなよ」

「どこが細かいんですか！」

ラウザは勢いよく机を叩く。その目の下に黒い隈があるのは、気のせいではない。

明浩は大きく欠伸をもらした。

「大体、俺はこっちの文字が読めないんだから勉強なんて出来る訳ないだろ」

「だとしても、努力はするべきです！ 本来の実力を発揮しないまま、怠惰に甘んじるのは罪ですよ！」

「そんなムツカシー事言われても分かんないっての」

明浩は呆れたようにラウザを見る。

「朝っぱらから元気だな」

部屋の扉が開き、ルーファスが現れた。そのまま腕を組み、椅子に座っている二人を見下ろす。

「あ、そういえば昨日の夜メシ、食べてないや。さっさと喰いに行

こつと」

明浩は席を立ち、逃げるように部屋を出て行った。ラウザとルーファスはそれを見送る。ルーファスはラウザを呆れたように見た。

「全然変わってないんだな」

「何がです」

「お前が、だよ」

ルーファスは明浩が座っていた椅子に腰かける。ラウザは部屋の中を見回し、目を細めた。微かに魔術の臭いがするのだ。

「ルーファス、またあの術を使っていたのですか」

「あの術ってなんだ？」

「とりあえず、解いてください。陛下のお膝元でこのような事、間諜と疑われても仕方ありませんよ」

ふん、とルーファスが鼻を鳴らすと、術の臭いが消え去った。

「相変わらず、鼻も良いねえ」

「確かに便利ではあります。それで、何の用ですか。まさかその事を言うために来た訳ではないでしょう」

扉をノックする音が響く。もっとも、扉は始めから開いている。ラウザがどうぞ、と促すと侍女が入って来た。

侍女は一礼をすると、茶器を運び入れ、それを机の上に整える。

侍女が礼をして扉を閉じたのを確認してから、二人は話を再開した。

「そつだな。まず、なんで異世界人を召喚なんてしたんだ？ わざわざ召喚する必要なんて、無かったはずだ」

「そんな事ですか」

ラウザは軽く息をつき、机の上に置かれた紅茶を口に含む。
ルーファスは目を細めた。

「現段階で勇者を召喚する必要はない、と伝えたはずだ」

「それを判断したのはわたくしではありません。陛下が決めた事です」

「お前の事だ。^{そそのか}唆すような事でも言ったのだろう」

ラウザはにやり、と笑みを浮かべる。ルーファスはそれを冷やかに見た。

「あなただから申しますけどね、わたくしにとって魔王なんていや、魔族なんてどうでもいい事なんです。民たちがどうなろうと、わたくしには関係ありません。それに、わたくしからしてみれば、魔王なんて良い研究材料にしか見えないですよ。」

魔王を調べる事が出来れば、わたくしたちは世界の真理に一步近づく事になる！なぜ、魔族が生まれるのか。なぜ、魔族がいた土地は豊かになるのか！わたくしは、それが知りたい！そうは思いませんか、ルーファス」

興奮したように喋るラウザを、ルーファスは淡々とした口調で返す。

「知らんな。それと、先に言っておく。魔王を甘く見ると、痛い目を見るぞ。どれほど魔術に自信があるとしても、過信はしない事だ。足元を掬われる羽目になるぞ」

「のぞむ所ですよ」

ルーファスは鼻を鳴らし、紅茶を一気に飲み干すと立ち上がった。

「俺はあの小僧でも鍛えてくるとする。お前はその間に、その意地の悪そうな顔をどうにかするがいい」

「それは無理ですよ。わたくしは元々この顔なのですから」

ラウザはにやり、と笑う。ルーファスは目を細め、部屋を出て行った。

明浩は多めの朝食を食べ終え、庭で惰眠を貪っていた。

朝と一言で表しても、ようやく人が活動を始めた様な時間である。城内はさすがに起きている人が多いものの、それでもいつもの活気とは程遠い。ちなみに、明浩が部屋に戻らないのはラウザに捕まるのを避けるためである。そのために、今も茂みに隠れるような場所にいた。

明浩が心地よい寝息を立てていると、誰かに頭を蹴られる。もつとも、それ程度では明浩の眠気はなくなるらない。そのまま寝返りを打ち、再び寝息を立て始める。

「……よく寝る奴だな」

ルーファスは呆れたように明浩を見た。その姿がある少女と重なって見えた。

（やはり、似ている）

あの少女も明浩と同様に、どこか変わった雰囲気を持っていたとルーファスはいふ出す。

愚かなまでに真っ直ぐな目をした少女。少女をそうさせているのは、絶大の安心感からだ。今まで誰にも騙された事や裏切られた事が無いのだろう。そして明浩も、少女と同じ目をしていた。そこまで考えて、ルーファスは長い溜息をつく。

「馬鹿馬鹿しい」

ルーファスは明浩の頭を足で小突く。

「起きろ、小僧」

「ん……あと十分寝かせてくれ」

再び寝返りを打ち、明浩は寝息を立てる。

その様子にルーファスは眉を顰めた。舌打ちをし、何事かを呟き始める。

「来い、精霊たちよ。遊びたいだろ？」

肯定するように、ルーファスの頬をそよ風が撫でた。

「そうか。なら、この小僧で遊ぶと良い。なに、魔力は心配するな。俺の魔力をやるから、存分に遊んでやれ！」

突如、明浩の身体が宙に浮き上がる。さすがに明浩も慌てて飛び起きた。

「うわっ！ な、なんだ、これ？ 浮いてんぞ！」

明浩はもがくが、地に足が着く事は無い。

「ようやく起きたか、小僧」

「小僧じゃなくて、明浩だったの！」

ルーファスは明浩の言葉を鼻で笑う。

「お前なんぞ、小僧で十分だ。精霊の姿が見えるんだろ？ だつたら、しばらくそいつらに遊んでもらうがいい」

「え、ちよつ、それ、どういう意味だよ！ …… って、うわあああああああああ！」

明浩は勢いよく、空の彼方へと飛んで行く。ただ、その悲鳴だけが虚しく木霊していた。

第9話

明浩は空を飛んでいた。というより、吹き飛ばされていた。

「な、なんなんだよ、お前ら！ 一体、なにがどうなっているんだ！」

明浩が叫ぶと、精霊たちが動きを止める。持ち上げている明浩を不思議そうに見た。精霊たちは顔を見合わせ、何事かを囁き合っている。しかしその言葉は明浩にわかる言葉ではなかったので、意味を知る事はできなかった。

当然、精霊たちが相談している間、明浩は無防備に宙に浮かされたままの状態だ。眼下には広大な森が広がっており、ここから落ちたら一たまりもないだろう。そのような状態で放置される方はたまった物ではない。

「おい！ とりあえず、下ろしてくれよ！」

明浩が叫ぶと、精霊たちは再び顔を見合わせる。精霊が頷く雰囲気を感じ取ると、唐突に明浩の身体は落下を始めた。もちろん、命綱など一切存在しない空の上からである。強烈な風が下から襲いかかり、明浩は思わず悲鳴を上げた。

「う……うわああああああああああああつ！」

どうにか空中でもがくものの、思い通りに身体を動かす事が出来ない。明浩は恐慌状態に陥っていた。

精霊たちは明浩が落ちて行くのを見て、顔を見合わせる。しばらく精霊たちはお互いの顔を見合い、明浩に向かって一直線に駆けつ

けて行つた。

眼下にある木々に身体をぶつけながら、明浩は落下していく。何度も衝撃を受け、明浩の意識は半分以上が飛んでいた。

（まさか……このまま死ぬのか？）

朦朧とする意識の中で明浩はそんな事を考える。

（まだ、死にたくない……！）

そんな事を考えていると、不意に落下が止まった。しかし、当然のことながら足は地に着いていない。

恐る恐る目を開けると、目の前に茶色の地面が見えた。まさしく目と鼻の先である。

「こ、こわー……」

その程度で済む事ではないが、今はそれしか言葉が出て来なかった。

地面に手をついて身体を起こすと、明浩の周りには精霊たちが浮遊している。ただの埃の様にも見える精霊は、全部淡い緑色をしていた。

明浩は少女　グラスフィの言葉を思い出す。

『精霊は術で利用される際、色を持ちます。炎であれば赤、風であれば緑、といった具合ですね』

目の前の精霊たちは今、術として利用されているようである。明浩は飛ばされる直前の事を思い出そうとした。

「あー……ルーファスのおっさんに飛ばされたんだっけ？」

精霊たちは明浩の周囲を浮遊し、囁き合っている。何かを思いついたのか、再び散っていった。まだ状況を整理している明浩はその事に気付かない。

「そんで、なんだっけ？ 遊んでやれ？ 遊んでもらえ？ ……あー！ もう、全然思い出せねえよっ！ そんで、お前らは何なんだ、よ……」

明浩が精霊たちに振り返ると、精霊たちはすでにいなかった。

「……一体、なんだったわけ……？」

明浩は頭を掻きながら立ち上がる。空から命綱なしで落とされるという恐怖体験の後では、とてもではないが眠れそうにない。もっとも、通常ならばそのような選択肢は始めから考えようもないものだが。

城に戻ろう、と明浩は思い立つ。

（ずいぶん飛ばされちったな）

右を見ても左を見ても、前を見ても後ろを見ても木しか見えない。空を見上げようにも枝に阻まれて方向すら確認する事が出来なかった。

「……どうしろって言うんだよ！」

まさしく右も左も分からぬ状況に身一つで放り出されたのである。木に登って上から探すという事も考えたが、ずいぶんな距離を飛

ばされているので、城の姿を見つけるのは困難だろう。

明浩は大きく肩を落とした。

「……なぜ、あなたがここにいるのですか」

場違いな幼い声に明浩は振り返る。

そこにはグラスファイがいた。以前のような可愛らしい服装ではなく、より質素な物に身を包んでいる。そのためか、自然と森に馴染んでいた。以前は流していたくすんだ金色の髪を一つに束ね、澄んだ赤い目で明浩を不思議そうに見ている。

森の中に一人残されたと思っていた明浩は、グラスファイを見て安堵した。

「ラッキー！　なあ、グラスファイ。俺、道に迷っちゃったみたいなんだけど、城への道って知ってたりしないか？」

グラスファイは無表情のまま首をかしげる。

「なぜですか？」

「いやあ、ルーファスのおっさんにさ、吹き飛ばされちゃったんだよ。それで、道に迷ってるってわけ。それどころかどこから来たのかも分かんねえしな」

「そうですか」

グラスファイは周囲を見回す。当然、見回した所で目印のような物もなく、グラスファイは首をかしげた。

「残念ですが、わたしには分かりそうもないです」

「はあ？　じゃあ、グラスファイはどうやってここまで来たわけ？」

自分の事は棚上げにし、明浩はグラスファイを見る。
グラスファイは首を振った。

「機密事項です」

「きみつ……なんだって？」

聞き慣れない言葉に明浩は首をかしげる。

「機密事項です」

「……ふうん？ 良く分かんないけど、言えないって事？」

グラスファイは頷いた。

「精霊に聞いてみたらどうですか。術で来たのであれば、精霊に返り道を示してもらう事も出来るはずです。あなたは精霊の姿が見えるのでしょうか？」

「ここまで連れてきた精霊はどうかいつちまったよ。だから困ってるんだ」

「魔術は使えないのですか」

「使えない。だってラウザの奴、文字が読めないのに本を読ませようとするんだぜ？ やる気なんか起きるかよ」

明浩の言葉にグラスファイは不思議そうな顔をする。

「なぜ、知らないのですか」

「そりゃ俺がこの世界の人間じゃないからだよ」

「いえ、わたしが言っているのはそういう事ではないです。通常、正規の召喚の手続きを経た上で召喚されたのであれば、文字はなんとなく理解できるものです。……もしかして、正規の手続きを踏んでいない？ いや、だけど、そんな事をすれば……」

グラスフィは小さく呟きながら、何かを考え始めた。

（なーんか、むつかしい事考えてんなあ）

グラスフィは顔を上げ、明浩を見つめる。幼いが整った顔立ちをしているグラスフィに見つめられ、明浩は動揺した。

幼いはずのグラスフィの目は、何か強い意志を秘めている。その事が明浩の心に何故か引つ掛かった。

「アキヒロという名前は本名ですか？」

「お、おう。蒲地明浩は本名だ」

唐突な質問を明浩は怪訝に思う。しかしグラスフィの目は真剣だったので、正直に答えた。

「この世界に来る前の 元いた世界の記憶はありますか？」

「ないよ」

隠す事でもないので明浩は正直に答える。

（けど、なんでグラスフィがそんな事を知ってたんだ？ そもそも、グラスフィに別の世界から来た事を教えたっけ？）

グラスフィは明浩の事情を知っているように思えた。城の中の誰かから聞いたのだろう、と明浩は考える。

「……そう、ですか」

そう口にしたグラスフィは、なぜか悔しそうで苦しそうな、様々

な感情がないまぜになったような顔をした。その事に明浩は深い後悔を覚える。

グラスファイのような若い少女がこんなにも苦しそうな顔をしてしまうのであれば、今後はこの事を絶対に口に出さないと明浩は心に決めたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8300x/>

クリア-スペル（勇者編）

2011年11月23日15時46分発行